

THE YOMIURI SHIMBUN

## 読者新聞

2019年(令和元年)

9月2日月曜日

## 文化

## 自閉症 学問分野超え再考

発達障害として社会的な認知度が高まってきた自閉症について、様々な学問分野から考える『「自閉症学」のすすめ』(ミネルヴァ書房)が刊行された。編著者の一人、野尻英一・大阪大准教授(哲学)は、「自閉症のことを考えることで、自分や現代社会のことが分かる」と話す。

本書は、心理学や哲学、文化人類学、生物学など18の学問・切り口から見た、自閉症についての論文やコラムをまとめたものだ。野尻氏と、高



「自分や社会のことを分かったらいいと思う人には、自閉症学が大きなヒントになる」と語る野尻英一・大阪大准教授

瀬聖吉・自治医大教授(臨床発達心理学)、松本卓也・京大准教授(精神病理学)が編著者となり、「障害」を本当に理解するためには、総合知が必要という観点から編集した。哲学者の國分功一郎氏、野尻氏は自閉症が、現代社会と人間を理解するキーワードだと指摘する。なぜなら、自閉症への注目度が急速に高まったの

は、ここ20〜30年のことだからだ。この間、何が起きたのか。先進国では、人と接するサービス業の割合が大きくなってIT化が進むなど、産業構造が大きく変化した。「コミュニケーション能力」が重視されるようになった。

さらに、自閉症を考えることは、「普通」とは何かを考えることにつながる。本書でも紹介されている通り、多数派の心の構造である「定型発達」と自閉症の人々との間に

群の計算能力がある人など、意思疎通が苦手でも一目置かれる人が多かった。自閉症の人もいたはずだが、とりたてて問題視されず、「社会の方は変わってきたから、異質な

例えは、自閉症の人の中にいて考えることが、自分たちが前提にしたことを考え直し、掘り崩すきっかけになると説く。

## 18の観点から論文・コラム集

人もいる。未経験の商品や食べたことのないものへの欲望がなく、貨幣の概念も定型発達の人とは違う。モノの見え方も違っている。そこに、序列付けや優劣は存在しない。野尻氏は「これまでの社会や学問は、定型発達を想定して組み立てられてきたにすぎない」と強調する。

自閉症の人は一見、現代社会に適応しにくいように見える。だが野尻氏は、近代以降の資本主義社会が、定型発達の人々の欲望を前提にしていると指摘する。それが今、環境や資源の面で立ちゆかなくなりつつあり、根本的な見直しを問いつける。自閉症について考えることが、自分たちが前提にしたことを考え直し、掘り崩すきっかけになると説く。

(小林佑基)